

トヨタで、危機管理から緊張高まる

『北の声(ラ・ヴォア・デュ・ノール)』紙、2009年4月7日(火)午前4時54分

セバスティアン・シェドゾー記者

先週金曜日に午前シフト組によって自然発生的に始められたストライキ運動は、昨日へと拡大した。オナンにあるトヨタ工場の3,340人を数える賃金労働者のうち200人近くが、この難しい危機の時に、より大きな配慮を払って欲しいと要求するため、ストライキに入った。

誰でも「黄色」スト破り者のことは知っている。それがトヨタでは、ストライキが黄組によって起こされたのだ。かくして、自然発生的に、労働組合組織の関与無しにである。少なくとも最初のうちは。みなぎっているわけではないにしても、少なくとも次第に、緊張の兆候が日本の自動車メーカーで生き物のように育っている。

金曜日の朝、全員、会社の幹部の前でオナン工場長が張り付いているパンチに整然と向かった。職場にたどり着くと、扇動者のものと判断される言葉が油のしみ込むように浸透していき、シフトの終わる11時30分から13時30分にかけて、およそ100人の賃金労働者をストライキ参加に導いていった。

彼らはもともと金曜日に働く義務などなかったと言わなければならない。経済危機が負担を強いるようになった。トヨタの生産を4日近く停止すべきであると主張した、先のフォールシアの社会運動がその後形を変えるに至ったことを除けばである。経営陣もまた、会社が壊れたらもはや月末に賃金は支給されなくなるであろうという、ドイツの顕著な例を引き合いに出して、最近の市場の震撼状態を強調している。

最近のある経済危機の際には、こうして、賃金労働者に対してさらなる奮闘努力が要求され、まったく何の増給もなしに、月3回の土曜日もそうであるのに、そのうえ4月の毎週金曜日に出てきて無給で働くことが勧誘された。特效薬、それは大概の病気の場合にCGTやFOを初めとした労働組合組織のところに駆け込むことであったが、今回それはお呼びではなかった。金曜日に開始された運動は、こうして昨日の午前まで、午前シフトの青組のイニシアチブで受け継がれ、そうして黄組に受け継がれて午後も保証された。夜シフト組がどういう態度をとるかについては不確かであったが、2百人近くのストライキ参加者がかくして丸1日ストライキをリレーしていった。皆が待っているのは、月末になると賃金労働者が家計を締めくくるのにますます困難を味わわなければならない時期にたいして、配慮がなされることなのである。具体的には、「部分的休業の際には100%支給するようにしてもらいたいということである」と、ストライキ参加者の2人の代表者、グレゴリー・ミノーとシル=ノエル・デブロックが、共同して要求している。そして、それゆえ、

金曜日と土曜日の追加勤務に対しては公正な価値で補償をするようにしてもらいたいというのである。

この心情から発した運動に直面して、トヨタではむしろ異例なことだが、経営陣は昨日泰然ぶりを保っていた。「事態がどう進展するかを見きわめられるまで待つ」と、広報部の統括責任者クリステル・ブランダンが、午後、われわれに説明した。状況が今日沈静化するであろうとは確信していなかった。